様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３１日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：２１５２０６３１
研究課題名（和文）　英語習得用多読的シャドーイングと多読的音読の効果的併用方法の研究と普及
研究課題名（英文）　Extensive Shadowing and Extensive Reading Aloud

研究代表者
岡山　陽子　（OKAYAMA Yoko）
茨城大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：20396592

研究成果の概要（和文）：この研究では、「多読的シャドーイング」と「多読的音読」の併用方法について３年間にわたり、研究してきた。その結果、学生にとって「多読的シャドーイング」は最初は難しさを感じるが、進歩を実感できるので、時折、行うことにより、学習意欲がわくことが分かった。一方で、「多読的音読」は困難さを感じることは少なく、楽しく学習を進めていける。従って、この二つの方法を計画的に併用していったクラスでは SLEP 読解テストの点数も受験者 14 名中 13 名が伸びた。また、CD 教材についてのアンケート結果をインターネット上に公開した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we found that both “shadowing” and “reading aloud” should be implemented in an extensive reading class. Student-participants were motivated by “shadowing” as they could see improvement by themselves. On the other hand, the students could enjoy “reading aloud” as they could understand the stories more easily than when “shadowing.” As a result, scores of SLEP reading test of 13 students out of 14 were improved in a class with fifteen 90-minute class meetings in fall 2011. Also, we opened an Internet site to show the data of the CDs we used for “shadowing” and “reading aloud” in our classes. This site is for all English learners and teachers who are interested in using the CDs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育、多読、多聴

１．研究開始当初の背景

（１）多読と多読的シャドーイング：多読は、様々な研究者・教育者によって研究・実践されてきたが、学生の読書量は年間数万語程度のことが多かった。本研究分担者酒井邦秀は、ネイティブの幼児用に出版された絵本などの非常に易しい本から開始して、小学校低学年用、青少年用と段階を踏んで大人用のペーパーバックまで、大量の英語の本を読むという多読方法を研究開発してきた。また、音声面でも同様に「易しいものを大量に自主的に学習」する、という考え方に基づき酒井が実践・研究してきたシャドーイング方法が「多読的シャドーイング」で、易しい音源を長時間聴いてシャドーイングを行う。学生は慣れてくると１時間でも平気になってくる。前回の科研費補助金による研究（以下、前回の研究）では学生のシャドーイングの様子を質的手法で記録し、多くの学生の発音が半期の授業でも自然な英語の音に近くなることが確かめられた。しかし、学生の聞き取り調査や、アンケートによれば、「多読的シャドーイング」は「多読」に比較して難しい、という声が多かった。そのためか、授業外で自主的にシャドーイングに取り組む学生は限られていた。「多読的シャドーイング」の難しさを解決すれば自主的シャドーイング学習が促進されるのではないか、と考えていたときに「多読的音読」の併用に思い至った。

（２）多読的音読：音読は、國弘正雄、土屋澄男を始め多くの研究者が英語習得に効果があると述べている。門田修平は、パラレル・リーディング（英語の音を聴きながら音読）→シャドーイング→音読の順で行うことを提案している。本研究代表者岡山がその方法を試みたが、教材が難しく量も少なかったせいか、英語の自然な発音獲得には至らなかった。ところが、前回の研究期間が終わるころ、ある授業で学生が CD を聴きながら易しい絵本の「音読」を自発的に始めていた。すでにシャドーイングを行っていたからか、学生の発音は、自然な英語の発音に近かった。その上、学生は「大変楽しい」と言う。そこで、「音を聴きながらの音読の併用」を思いつき、「易しいものを大量に自主的に選択できる音を聴いての音読」を実施した。その結果、「CD 付き図書」を「とても楽しくて家でも聴きたい」と借り出していく学生が増えた。この「音を聴きながら易しい教材を大量に音読する方法」を本研究代表者岡山が便宜上「多読的音読」と名付けた。

（３）多読的シャドーイングと多読的音読：多読的音読を本格的に授業に取り入れる際に、多読的シャドーイングとどのように併用し、進めていけばいいのだろうか。その点を解決するために、この研究を行うことにした。また、前回の研究では実践できなかった多聴用音源のデータをインターネット上で公開することを目指した。CD は、図書に比べて一般的に高価で購入前に視聴することも難しい。そのために、音源を学生が聴いた感想を中心にデータをインターネットで公開すれば、一般の英語学習者、教育者が CD を購入する際の参考になるのではないか、と考えた。

２．研究の目的

この研究には、主な目的は以下の３点である。
（１）「多読的シャドーイング」と「多読的音読」を英語授業に導入して、学生のシャドーイングや音読の過程と変化を音声と映像などで学生と教員が記録して、どのように併用すればどのような効果があがるかを検証する。
（２）多読的音読用教材を発掘・研究しそのデータベースを作成して、インターネット上で公開する。
（３）上記の（１）（２）で得られた結果を学会・研究会などで広く発表をし、地域や英語教育者、英語学習者に貢献する。

３．研究の方法

（１）質的手法：茨城大学の教養総合科目（選択授業）の多聴多読講座（岡山・上田担当）の参加学生がこの研究への主な参加者だった。各年度、この授業の初回に、参加学生に対して、この研究の説明をし、ビデオ撮影・アンケート調査、結果の研究への使用の了解を取った。
授業では、学生のシャドーイング・音読のビデオ撮影をし、シャドーイングや音読についての感想を書いてもらった。また、各自が読んだ語数、CD を聴いた時間を記録してもらった。教員はどのような CD をどのくらいの時間、どのように使用したか、また、どの程度の多読の本をクラスに導入したか、また、学生の様子を記録していった。
（２） 量的手法：学生が CD を使用した活動をする時には、できる限り、その CD についてのアンケート（下記記載のインターネットサイト「多読的多聴（シャドーイング）用音源検索サイト」参照）を実施したが、アンケート回答には時間がかかるので、必ず実施したわけではなかった。従って、CD 音源によっては、十分な数の回答が集まらなかった。このアンケート結果から、CD をレベルに分ける予定だったが、それだけの回答が集まらず、

個々の学生による感想をそれぞれのCDについてグラフ化したものをこのサイトには掲載してある。

４．研究成果

各年度の研究内容および成果は以下の通りである。

（１）平成２１年度：茨城大学で前学期に「簡単な絵本からペーパーバックへ－100時間多聴講座①」を、後学期に「同講座②」を岡山・上田で開講し、多読・多聴を実施した。多聴では、シャドーイングを最初に行い、その後、図書の付属CDを聴きながら、黙読と音読、を併用した。

①学生は、最初は、黙読をしてから音読に移行していたが、学期が進み、慣れてくると、「聴きながら音読」を初見の図書に関しても抵抗なく行うようになってきた。

②有田は、CDについてのアンケートを実施した。平成22年度に新規購入したCD付図書の中でも、「I AM READING」や「Curious George」のシリーズが楽しかったという意見が多かった。ただし、元々が子供向けのシリーズのために幼稚でつまらない、という意見もあった。

③平成22年１月23日には酒井も含む当該研究者４名で多読・多聴を広めるための講演会等を沖縄県で実施した。なお岡山は沖縄高専で実施されているディベート授業を参観し、多読・多聴実践について意見交換を行った。

（２）平成２２年度：岡山・上田・有田は茨城大学「簡単な絵本からペーパーバックへ－100万語多読多聴講座」を開講し、酒井は電気通信大学での英語授業内で多読多聴を実践した。その結果、次の点が分かった。

①「多読的シャドーイング」は「多読的音読」に比較して最初は困難であるが、ある程度慣れてくると、「多読的シャドーイング」のほうが実践しやすいこと。また、進歩がよく分かるので、学生にとっては励みになること。

②難しい音源に取り組む必要はなく、易しくて、自分が楽しく感じられる音源に取り組むことにより、最初は難しかった音源もやがて取り組みやすくなること。

③学生のシャドーイング・音読の音声をレコーダーに入れて聴いてもらうと自分の音とCDの違いが分かり、学生の指針となること。

④ペアやグループで、「読み聞かせ」や「本について英語で語るブックトーク」などの活動を入れると学生が楽しめるだけではなくスピーキング能力への橋渡しとなるようだ。

（３）平成２３年度：学生のシャドーイングと音読の併用方法については、昨年度までの実践・観察・学生からのアンケート結果を踏まえて、今年度のクラスでは、90分のクラスを「シャドーイング→多読的音読→黙読→多読→ブックトーク（自分の好きな本を選んでそれについて話すこと。ただし、最初は、本の文章をそのまま読んで聞かせる、いわゆる『読み聞かせ』で良い、とした）」という組み合わせでデザインし、学期開始時から学期終了時にかけて、時間配分を考えながら、授業運営を行った。

ただし、ブックトークは毎回行ったわけではなく、３回に１回程度の頻度で行った。また、シャドーイングの時間は、最初は、５分から始めて、学生の様子を見ながら徐々に伸ばしていき、２０分行ったこともあった。ただし、シャドーイングの時間が長くなると、音読や多読の時間が短くなる。時間配分は、以下のような配分で行った。「シャドーイング（10～15分）→多読的音読・黙読（25～30分）→多読（30～40 分）→ブックトーク（0～10分）、その他（5～10分）」

今年度の大きな特徴は、学期開始時に、学生には、最初の頃の本は、トレーニングだと思って読んでいくと良い、と話し、本の選択自由度を低くしたことにある。最低限シャドーイングや読んでほしい本・CDを教員側で用意して学生にはそれをこなしてもらった。学期半ばを過ぎ、ある程度の力がついてから本の選択自由度を高め、各学生の好きな本を選べるようにしていった。選択自由度が高いと、選択する時間が必要となり、その時間が勿体ない。教員側から、読む本を提供すると学生もどんどん読んでいった。

また、ブックトークは、最初は、易しい本を一人１分くらいで、読み聞かせ（本に書かれている英文をそのまま読む）で良いとしたが、だんだん慣れてくると本の内容を子供に話して聞かせるように読む学生も出てきた。

学期半ば頃に、大学の文化祭があったりして、学生が疲れてきたり、本を読むことに飽きが出てくる時があるが、その時に、このブックトークは学生に活力を与えた。また、ブックトークはグループで行ったので、お互いが知り合うのにも役立ったようで、クラスの雰囲気を和やかなものにするのにも役立った。

平成２３年度の結果は以下の通りである。

① どの学生もシャドーイングがかなり上手になり、最後のシャドーイングテストは評価が良かった。

② ブックトークの試験も行ったが、ブックトークも『読み聞かせ』で終わるのではなく、本の内容についても語る学生が増えていて、学期開始時に比較すると話すことにも慣れたように見受けられた。

③ 学期始めと終わりに、SLEPの読解テストを行ったが、半期 15 回のクラスだったが、受検者 14 名のうち 1 名を除いた全員の点数が伸びた。この 13 名の伸びの平均は、100点換算では、12.2点だった。

④　インターネットサイト
http://tacho.cue.ibaraki.ac.jp/
多読的多聴（シャドーイング）用音源検索サイトを作成した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Nakanishi, T., & Ueda, A.、『Extensive reading and the effect of shadowing』、Reading In A Foreign Language、23－1巻、1－16、2011、査読有
② 有田由紀子、『How to teach presentation skills effectively』、茨城大学大学教育センター年報、第 14 号、131－143、2010、査読無
③ 有田由紀子、『茨城大学全学共通英語教育のレベル間接続における現状と課題』、茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集、第８号、107－122、2010、査読無

〔学会発表〕（計３件）
① Ueda, A., & Nakanishi, T.、『The effect of learning styles on extensive reading』、The 9th ASIA TEFL International Conference、2011.7.29、韓国ソウル
② 酒井邦秀、『Tadoku授業の光と影』、大阪府高等学校英語教育研究会、2010.8.27、大阪
③ 上田敦子、『Start your ER class with VERY EASY level and promote fluent, autonomous learners』、The 8th Asia TEFL International Conference、2010.8.7、ベトナムハノイ

〔図書〕（計２件）
① 常行敏夫、岡山陽子、ダン・ワルドホフ、三恵社、『A Clever Way to Read Economic News』、79 頁
② 古川昭夫、上田敦子、コスモピア、『英語多読入門（CD 付）』、236 頁

〔その他〕
ホームページ等
http://tacho.cue.ibaraki.ac.jp/
多読的多聴（シャドーイング）用音源検索サイト

６．研究組織
(1)研究代表者
岡山　陽子（OKAYAMA YOKO）
茨城大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：20396592

(2)研究分担者
上田　敦子（UEDA ATSUKO）
茨城大学・大学教育センター・准教授
研究者番号：30396593

酒井　邦秀（SAKAI KUNIHIDE）
電気通信大学・電気通信学部・准教授
研究者番号：80092609

有田　由紀子（ARITA YUKIKO）
茨城大学・大学教育センター・講師
研究者番号：30435127